

平成27年度ユニバーサルデザイン（UD）教育の取組

1 学校名	佐賀県立高志館高等学校		
2 所在地	佐賀市大和町尼寺1698		
3 校長名	荒木清史		
4 学級数 児童生徒数	9学級 351人	5 実施学年 児童生徒数	食品流通科2年 37人

6 取組のねらい

普段の学校生活の中で特に不便を感じることはない生徒たちに、障害のある方々の気持ちに気づくことを目的に、バリアフリー化された校舎の中でどのようなことに不便を感じるのか、実体験を通して考えさせる。また、ユニバーサルデザインについてより深く学習し、生徒たちが日々取り組んでいる食品製造の実習において、消費者の視点に立って改善できることを話し合い改善することで、日々の実生活の中で新しい視点で物事を見る力を養成する。

7 取組の実際

普段不自由なく移動している廊下を使って、アイマスクを着用して移動させることで、得られる情報の違いでどれだけ不安や不自由を感じるかを体験した。また、バリアフリー化した校舎の中を車いすを使って移動することで、実はちょっとした段差でもすごく障害になるということを体験した。



アイマスクを使用しての移動

車いすでの移動

授業では、ユニバーサルデザインとバリアフリーの違いをはっきりと理解し、実生活の中にユニバーサルデザインを活かした施設や商品が沢山取り入れられていることを学んだ。



ユニバーサルデザインについての学習

商品の改善についてグループ討議

その後、自分たちが実習で生産販売している、クッキー・パウンドケーキ・シフォンケーキについて、もっと開けやすく食べやすい包装の形がないかグループで話し合い発表した。具体的に改善できそうなクッキーについて新しい包装の形を具体化した。



改善前の袋

余分な部分を切り開けやすく改善

簡単に開くようになった

8 取組の成果と課題

アイマスクを着用して移動する際に手すりや点字ブロックなどの情報がないと全く歩いて進めないことがわかった。車いすでの移動では、校舎はバリアフリー化されているように見えて、ちょっとした段差だけで前に進めないことを実感した。

UDについては「家庭」や「保健」で定義は学んでいたものの、実際の設備や商品の例を知ること自分たちが製造している商品にももっと改善の余地があることを知った。ちょっと視点を変えることで、ほとんどの生徒が具体的な改善策を発表することができた。そのうちの一つ、クッキーの包装を改善したことで、今後も新しいアイデアを積極的に出していこうという意欲の高まりを感じることができた。今後もユニバーサルデザインの7原則を意識した活動を続けていきたい。